

この人を見よ

「少年の主張」全国大会で発表した大阪府立盲学校中学二年神田知佳ちかさんの文を、私は繰り返し読み返して読んでいた。その思想が透徹とうてつし、しかも温かさをたたえていたから。

幼い子は失明時の一大混乱をふり返る。「世界がひっくり返ったように全てが変わってしまった。私は光を失った。今思うと、私以上に両親の受けた衝撃はどんなに強かったことでしょう。小学四年の春でした」。

両親の苦悩の深さを思いやる、優しさの極みきまである。彼女はこれからの行きゆく道をたんとたと述べている。

「私が毎朝電車に乗ると決まって学校の近くの信号まで手引きをして下さる女の方がおられます。私の気付かないところで、どれだけ多くの人たちが見ず知らずの私に優しさを惜しみなく与えて下さったことでしょう。私は光と自由を失ってももっと素晴らしいものがあることを知りました。人の心の優しさということです」。

「優しさ」は人類救済の唯一の原理である。そのためにも優しさは実践に身を固め

ねばならない。この幼い魂はそのために見事な回答を実践的に用意しているのである。

「与えられることが多く、与えることの少ないものが、本当に心の優しさを理解することができらうか。今の私には誰かに優しくしてあげられるものがない。いつの日にか、与える喜びを通して与えられる有り難さの本当の意味を、私は知らなければならぬ」。

彼女はそして人生設計を立てる。――中学の英語の先生、生徒に囲まれ自分のすべてを捧げよう。彼女がそれまでにうけた優しさのすべてに負けないように。それでも小さな胸は震えている。「もし、私の小舟が難破しそうになったら、あなたの優しい手をお貸し下さい」と。

幼き魂よ。ここにはすでに完成された人生観がある。私は人生をやり直そう。

(一九八四年七月二日)